

# 特集 震災を越えて



宇城総合病院 病院長  
江上 寛

皆様お疲れ様です。この度の熊本地震により被災されました地域の皆様方には心よりお見舞い申し上げます。宇城地域は震源の一つであり、気象庁から発表されたデータによれば、前震と本震の間の4月15日午後10時頃に宇城震源の震度6強の地震があり、この地域は震度6強の地震に3度見舞われたこととなります。これが宇城地域の被害の大きさの要因の一つと考えられます。宇城総合病院も大きな被害を受けました。外壁の一部が落下し、大窓のサッシやガラスが破損し、パイプの損傷による漏水や一部診療機器の破損など内部設備にも損害が発生しました。幸いにも、柱・梁、重要機器など病院の躯体に関わる大きな損傷はなく、4月14日の前震、4月16日の本震を通して診療を継続することが出来ました。被災地の災害拠点病院は、発災後もその機能を維持し、被災患者を含めたすべての患者さんの診療にあたらなければなりません。今回の震災では、発災直後の初期期、急性期、その後の亜急性期、慢性期と災害後の各時期に応じて継ぎ目無く診療する

ことができ、その役割を果たすことが出来ました。これもひとえに皆様からの物心両面にわたる温かいご支援の賜物と存じます。県内外から頂きましたご支援、ご協力に感謝申し上げます。

4月14日午後9時35分病院では夜勤体制の中、震度7（宇城地域震度6強）の前震に見舞われ、配管の損傷による水漏れとそれによる床上浸水が発生しました。その対応に追われる中、最初の外傷患者さんが運ばれ、救急外来は本番を迎えました。少し落ち着きを取り戻した矢先の4月16日午前1時、本震が発生し、救急外来は患者さんであふれ、二日間で170名の外傷患者さんが来られました。その後も避難所、車中泊での体調の悪化や急病の発症、持病の悪化など、発災後2週間で約2,000名の方が外来受診され、救急車の搬入台数は160台に及びました。幸いにも、病室の被害は少なく、けがをされた方もなく、入院されていたすべての患者さんに通常通りの治療を継続することができました。

一方、病院の外来ロビーと待合スペースにはピーク時で約60名の方が避難してこられました。駐車場にも車中泊をされている方が多数おられ、病院は夜間、休日も施設を開放しました。ただ、余震が続き、安全の



ドクターヘリ搬送

出来ました。24時間以内には通常勤務者を含むほぼ全職員が集まり、業務分担を含めた災害対応体制が整いました。振り返れば、発災後72時間の初期期と、続く急性期の診療をいかに行えるかが最初の関門であり、亜急性期から通常診療にスムーズに移行していけるかが次の関門でした。私たちも初動、急性期を経たところで先の見えない疲労感と不安感にさいなまれましたが、幸いにも発災1週間後に、東京都の南多摩病院AMAT teamが到着し、2チームが交代で1週間にわたり支援をしてくれ

ました。夜間、休日の救急外来の1ブースを担当してくれたおかげで、当院職員の負担が軽減されただけにとどまらず、救急医療の第一線で頑張っている若い医師、看護師の仕事ぶりを見ることができ、私たちのモチベーションもぐっとあがりました。この支援もあって、なんとか乗り切ることができました。まさに病院の気力、体力のすべてを動員した総力戦でした。

本震があった夜、病棟で90歳のおばあちゃんが「こんなことは生まれて初めて」とほつりと言われました。笑って励ましながらも、自分たちがいままさに歴史的震災の真只中にいるということを実感させられました。大変な思いをした震災でしたが、助け合いながらこのつらい期間を一緒に乗り越えたことで、地域の皆様、そして職員相互にこれまで以上の強い一体感が得られたような気がします。かけがえのない経験をしました。さあこれから復興です。先日の参議院選挙の前には、復旧ではなく夢のある復興だとの力強い言葉をたびたび耳にしました。時間が経過してもこの言葉どおりであることを信じて、原形復旧ではなく以前よりもさらに強く復興したいと念願しています。これからもご支援、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

ため業務用エレベーターを停止させなければならなかったのは想定外でした。200名以上の患者さんの食事を1日3回運びあげなければならず、リレー方式で一膳ずつ階段を運び上げました。これには結構体力を使いました。病棟は発災翌日には入院患者さんで満床となり、ベッドを増設して入院治療に当たりました。職員はそれぞれが被災しているにもかかわらず、発災直後から4時間以内には夜勤勤務者19名の他100人が駆け付け、被害を最小限に抑え、機能を維持し、業務を継続することが



AMAT teamによる医療支援



被災後避難場所として開放した待合スペース